

# 情報教育における実務教育

十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 教授 田倉 昭



## はじめに

十文字学園は、創設者十文字こと先生の「教育を受けたいと思う女性がひとりでも多く学べる学校を作りたい」という強い願いのもと、1922(大正11)年に設立され、90余年におよぶ歴史をもっています。建学の精神は、学園歌「身をきたへ 心きたへて 世の中に たちてかひある 人と生きなむ」のなかに込められています。生活情報学科では、学生が情報とビジネスを学び、学んだことを社会で生かすことで建学の精神を実現しています。

## 学生の育成方針

生活情報学科は、情報コースとビジネスコースの二つのコースを有しています。どちらのコースにおいても、ICT技術の発達により多様化する社会において、自ら考え、社会の変化に柔軟に対応できる人間の育成を目標としています。この目標を実現するため、本学科のカリキュラムは、上級情報処理士とウェブデザイン実務士の資格がともに取得可能な幅広いものとなっています。学生は、二つのコースのいずれかに所属することにより一つの専門を深く学びます。さらにもう一方のコースの専門知識や技術を加えることにより、広い視野を持ち実社会で活躍することができる人材を養成します。このように、知識や技術を複合的に学ぶ体験を通して、自らを発展させる力を身に付け、その結果、生涯にわたって学び続けられる人材を育成します。幅広いカリキュラムにより、多くの学生が様々な資格を積極的に取得しています。資格取得を通して、学生は自信を持つとともに、そのプロセスを通して知識や技術を深め、視野を広げています。

## 情報教育における実務教育の実施例

本学は、平成26年度に「新座市をキャンパスに！+(プラス)となる人づくり、街づくり」というテーマで、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に採択されました。本事業には、学生が主体的に活動するプロジェクトが数多くあります。その中の一つの情報系プロジェクトで、学生の力だけで多くの人に使用されているプロダクトを開発した例を紹介します。

埼玉県の男女共同参画課より、スマートフォンで動作するデートDV防止啓発アプリの開発依頼を頂き、学生2名が共同開発しました。2名の学生は、もともとオリジナルゲームを作りたいと考えており、しかもAndroidのスマートフォンでのアプリ開発を勉強していました。時を同じく埼玉県がスマートフォンアプリを使った高校生等へのデートDV啓発を行いたいと考

えていることが分かりました。そこで、本学に開発依頼を頂き、デートDV啓発アプリ「あなたの恋は大丈夫？」を開発しました。クイズ形式で出題される質問に答えるとデートDVの危険性があるかどうかを判定するアプリです。開発したアプリは、Google Playで無料公開しています。

情報教育に限ったことではありませんが、考えたことを実際に形にすることで、それまで見えていなかった問題が現れることはよくあることです。デートDV啓発アプリでも、学生が最初に作ったものは、一見問題なく動作するのですが、この種のアプリとしてはサイズが極端に大きなものとなっていました。そこから提供までの1ヶ月間で実用的なプロダクトに仕上げました。このアプリ開発を通して、学生たちは実用性には機能と性能、使い勝手のバランスが大事であることを学んだことと思います。また、学生でも多くの人に使われ、社会に役立つものを作ることができることを経験し、大きな自信となったことと思います。現在は、後輩の学生がiPhoneで動作するアプリを新規に開発しています。

## 情報教育におけるアクティブラーニング

ウェブデザイン実務士の必修科目としてJavaScriptを使ったWebプログラミングの授業があります。そこでのアクティブラーニングの取り組みを紹介します。この授業では、資料の提供と課題の提出にE-learningシステムを使っています。課題の採点を翌週の授業までに行います。授業の冒頭で、前週の課題について解答と解説を行います。学生の解答の中には、ときには思いもよらない発想の解答があり、私自身も嬉しくなります。その個性を否定せず、伸長するように心がけています。また、課題提出時に学生から出された質問には、課題の採点結果とともに次の授業までに回答します。ICTが発達し、どんなに情報化社会になっても、この学生とのコミュニケーションが、学生の意欲を向上させ、課題に積極的に取り組む姿勢が生まれているように感じております。

## おわりに

十文字学園女子大学生生活情報学科で行っている情報教育における実務教育の一部を紹介しました。これからも社会とかかわり、学生が自ら考えて行動し、学生の考えを形にすることにこだわった実務教育を積極的に進めていきます。その結果として、一人でも多く社会で活躍する人間を送り出していきたいと考えています。